

増殖しつづける神戸

文 玉岡かおる
Tamaoka Kaoru

画 浅妻健司

今年の初詣は、神戸の生田神社に出掛けた。

例年たいへんな人出で、参道近くは交通規制で車は通れず、人も押すな押すなの大混雑。長くここに住んでいけばそんなことは百も承知だから、元旦に神社に近づくことは極力避けてきたのだけれど……。

「せっかくなら神戸に帰ってきたんだから神戸らしいところにお参りしようよ」

長女一家が東京から帰ってきており、ぜひとも生田さんに行きたいと言うのである。そう、神戸は生田神社からすべてが始まった。その字のおおりに、生田の神様を崇敬する民が戸を構えたから神戸という。私と夫も、結婚式を生田神社で挙げた戸の一組といえる。

長女とその夫、それにおととし生まれた赤ちゃん。1歳になりヨチヨチ歩き始めているから、この神様に初お目見えて家内安全を祈願するにはいい機会にちがいない。

雑踏にも怯まない若夫婦に押し切られ、家族みんなで参道へ。たしかに、駅周辺の混雑に文句を言うのは筋違いだ。もともと神様がいた場所に、人が勝手に集まり町を作り、人に便利なように電車を引いたりビルを建てたりしてきたにすぎないのだ。

150年前の歴史的できごと起因する。国策でこの寒村を国際港として開くことになり、神様の地を揺るがせたのだ。

幕末にアメリカと結んだ条約では、開くと約束したのは兵庫だった。でもそこは大勢の人間が住んでいるから、港ができて異人さんが押し寄せたら困る。ならば人の少ない神戸でいいだろう、となった経緯は想像がつくが、なんとも人間中心の理論である。神様にしてみれば、おいおいこっちかと反論したいところだろうが、当の西洋人たちが測量の結果神戸を気に入ったから止められない。神様が異議申し立てをしないのをいいことに、人は力を合わせて住める町へと変えていく。

もつとも、港を整備するにも建物を建てるにも、いわゆるインフラ整備にはカネがかかるもの。なのに住人が少ないため、もつともなる税収がない。そこで神戸は増殖を始めることになった。じわり、じわり、人の多く住む隣のエリアへ、さらにその周辺へ。山を越え、川を渡り、摂津と播磨の境さえも侵し、現在の神戸ができあがっていくのである。

したがって、神戸イコールいち早く外国の文物が流入するハイカラな港町、なんてイメージでいると、あらここも神戸ですか、とギャップのありすぎる山奥がエリアになっていて驚くことになる。たとえば六甲を越えたところにある有馬温泉は、寒村神戸とは比較にならない知名度と古い歴史を誇り、太閤秀吉はじめ歴史上の人物が訪れたほど

それは古代の地図を見れば一目瞭然。埋め立て地などない神戸のエリアは、六甲山が海辺まで迫り、ほとんど平地がないのが見てとれる。おかげで耕作や居住には向かず、人間が生活する場として拓けなかった。せいぜい沿岸で魚や海藻をとる漁民がほそぼそ暮らしていた、というのが現実だろう。

ただ、神様が降臨する高い山だけは東西に延び、沖を行く舟の目印となったり航海の安全を祈る対象となっていた。人が住めないかわりに神が住んだ、それが神戸だったのだ。

雨が降れば頂上から一気に急流が注ぎ生田川があふれてしまうので、わずかな平地も水浸しになる。なんと、生田神社もともと六甲の砂山という高いところがあったのを、洪水で流され今の場所に鎮座したそう。ついでにその洪水の折、境内の松の木はことごとく流されたため、今の位置に落ち着いてからは松は植えず、能舞台の鏡板にすら松を描かず流されにくい杉の絵にしたというほどだ。人々は、自然の猛威を恐れ神を敬い、長く神戸をそつとしてきたのである。

さてこんな、災害が多くて人の住めない土地が、一躍、今日のような人口150万を擁する政令指定都市に発展するまでになったのは、ちょうど

であるのに、今や神戸の一部。源氏物語に登場するほど文化度の高い明石だって、あわや合併され飲み込まれる瀬戸際だったこともある。

しかし、だからこそ思うのだ。始めは神様しか住まない荒涼たる地が、いつか逆転、あふれるばかりの人で賑わう大都市になったことのふしぎ。それはまさしく神様ではなく人の力のなせるわざだろう。

ならば度重なる災害に見舞われたとしても、また立ち上がる人の力があるということだ。誇れる歴史の長さなどなくても、たえず新しいものを惹きつけ増殖していく、そんな神戸を好きだという人たちがいる。それがとりもなおさず神戸という地のパワーなのだ。

「今年もいい一年でありますように」
人混みに押され本殿に到達すれば、長女夫婦に抱き上げられた赤ちゃんが、鈴の音に目を見張りながらもみじのような小さな両手を合わせた。この日、群衆の中で、まぎれもなく新しい神様の戸のデビューだ。

人あるかぎり、この地に人が積み上げる思い出という歴史は、なお増殖を続けていくことだろう。

たまおか・かおる 1956年、兵庫県生まれ。1987年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』で神戸文学賞を受賞し、作家デビュー。2009年、『お家さん』で織田作之助賞受賞。主な著書に『銀のみち一条』『お家さん』『負けんとき』ヴォーリス満喜子の種まく日々』『花になるらん』明治おんな繁盛記』などがある。

